

自らを律することの大切さと難しさ

学生担当 宮崎 真至

日本大学が掲げる“自主創造”という教育理念は、物事を主体的に考え、課題の解決能力あるいは状況の急激な変化に対応できる能力を備えた人材を育成することを目標としています。この人材育成の基本が、学生自身が“自ら学ぶ”という姿勢となります。そのために大切なのは、「自分を律すること」となるわけです。

自分を律するとは、一定基準に照らして自分自身をコントロールすること、あるいは自らに打ち克つこと、といえます。例えば、学生が勉学に励むことは当然のことであり、これが一つの“ルール”ともいえます。このルールに従うからこそ、一定基準以上の知識と技術が身につき、将来の歯科医師としての素養を得ることができるのです。一方、自ら学ぶことに関しては、決して楽なことばかりではなく、自分の理解が届かない問題に対峙した際には、苦痛さえ感じるものです。勉強とは、元来孤独なものであるのですが、これを乗り越えるために、仲間との語らいや先輩からのアドバイスも必要となります。

大学においては、学修に対しての厳しさが求められる一方、多くの人的交流によって人間的成長が期待されます。現状では、日常生活に様々な制限が求められていますが、新しい日常をできるだけ早く獲得できることを切望するとともに、今後とも、その方策を皆で考えていきたいと思えます。（教授 歯科保存学第Ⅰ講座）

歯学部・歯学部附属歯科病院が担った (職域) 日本大学お茶の水接種会場

1 職域接種の終了

令和3年9月1日午後3時40分。理工学部(駿河台校舎)1号館2階会議室。6月21日から延べ22日間、同校舎1階から6階を使用し実施した本学職域接種(お茶の水会場)責任者最終ミーティングが始まった。

ミーティングの冒頭、会場総責任者本田歯学部長から会場スタッフに対し挨拶と謝辞があり、これに続き会場における諸事コーディネーター役を22日間の長きにわたり果たされた会場責任者米原歯学部次長にその労をねぎらう言葉があると会議室全体から万雷の拍手が自然と沸き上がった。

続いて、司会の大学本部総務部渡邊法務課長から「本日の接種数、1,300回」、「期間中の総接種数40,573回(9月2日、3日、24日実施の接種数を除く)」と告げられた。

これをもって、会場総責任者本田歯学部長、会場責任者米原歯学部次長、飯沼歯学部附属歯科病院長の3人を筆頭に歯学部・歯学部附属歯科病院がメインとなり、大学本部、日本大学病院、理工学部、医学部、薬学部と連携・協力して実施した本学職域接種(お茶の水会場)での接種が大きな事故、トラブルもなく無事終了した。

今般、本紙面において、職域接種(お茶の水会場)に係る概要について報告する。



2 職域接種に向けての準備

令和3年6月1日午前、内閣官房長官記者会見にて同年6月21日から企業や大学等において、職域(学校等を含む)単位でワクチンの接種を開始することを可能とする旨の発表があり、同日厚生労働省健康局健康課予防接種室からその詳細についての事務連絡が発せられた。

これを受け本学では、同年6月8日大学本部における会議体の議を経て本学学生及び教職員等を対象とする職域接種の実施及び推進体制を承認。同年6月11日には、大学ホームページに本学職域接種実施に係る周知文を掲載した。

同年6月14日・17日に会場責任者米原歯学部次長が日本大学病院に出向き、職域接種に係る同病院医療従事者連絡会に参加、同病院医療従事者との実施に向けた情報共有を図るとともに歯学部・歯学部附属歯科病院等との万全なる連携体制を構築し職域接種実施に向けての環境を整えた。

同年6月15日、大学本部主催の職域接種に係る説明会が開催。同年6月16日、会場総責任者本田歯学部長、会

場責任者米原歯学部次長が主催する「現場担当者打合せ会」

を会場となる理工学部(駿河台校舎)1号館会議室で大学本部、日本大学病院、理工学部、歯学部・歯学部附属歯科病院関係者参加のもと開催。

この場においては、医療従事者の観点から本田歯学部長、米原歯学部次長から「接種会場と接種後の待機場所を同一階、同一フロア内とすべきでは」、「会場内導線の更なる短縮化・簡素化を図るべきでは」等の助言・提言が多々なされ、会場設営原案を大幅に変更することにより安全面・運用面において当初の設営等計画原案から飛躍的にその質的向上が図られた。

一方、歯学部附属歯科院内では、飯沼同病院長がコロナウイルスワクチンの打ち手の確実なる確保に向け奔走、同病院の熱意ある献身的な多くの歯科医師が名乗りを上げた。

限られた期間であったが歯学部・歯学部附属歯科病院が主力となり手際よくその職域接種実施に向けた準備を整えた。



3 職域接種の概要

【受入れ対象学部・対象者等】

大学本部、大学本部(競技スポーツ部所属学生)、法学部、経済学部、理工学部(習志野高校含む)、生産工学部、歯学部、通信教育部、本学附属校(日大・鶴ヶ丘、豊山、豊山女子、明誠、幼稚園、認定こども園)、本学特別・準附属校(日本大学第一学園、同第二学園、同第三学園、目黒日本大学学園の各学校法人が設置する学校等)、他のワクチン接種対象者のうちワクチン接種を希望する学生、教職員、学校関係者等(当初想定20,500人)

【職域接種実施日】

令和3年6月21日～24日、28日～29日、7月19日～21日、26日～30日、8月2日～4日、26日～27日、30日～9月1日(延べ22日)

【職域接種個別対応実施日】アナフィラキシー等及びその他理由による

令和3年8月5日～6日、9月2日～3日、24日(延べ5日間)

【平均接種数】

1日につき約1,850回(接種最小数1日:530回、同最大数1日:2,450回)※職域接種個別対応実施日を除いて算出した値

【総接種数】

40,678回

【会場スタッフ (医療従事者・事務局係員) 数】

1日につき延べ数含め約160名

(内訳)

歯学部・歯学部付属歯科病院等から	延べ約50名
日本大学病院、医学部、薬学部等から	延べ約20名
大学本部、理工学部他各学部事務局等から	約90名



4 職域接種会場の1日の流れ (令和3年6月28日の場合)

午前7時30分、会場となる理工学部(駿河台校舎)1号館2階の『実施本部』に実施本部付事務局スタッフが参集。会場総責任者本田歯学部長、会場責任者米原歯学部次長と実施本部付事務局スタッフにより当日の特記事項等を最終確認。

その後、午前8時からおよそ10分間程度の事務局係員ミーティングを開催。ここでは、前日の反省事案への改善対応策について周知と確認が徹底され、その後、部署ごとのミーティング、同8時35分には、係員の配置が完了となり同8時40分には、医療従事者が問診会場、接種会場、待機会場のそれぞれに集合・配置。

この間、この日、午前9時から同11時までワクチン接種の担当者として打ち手となる会場総責任者本田歯学部長、飯沼歯学部付属歯科病院長は、接種会場にて会場確認とワクチン接種担当の歯科医師、看護師ときめ細かな打合せを行っていた。

また、この日も終日、被接種者への問診を担当する会場責任者米原歯学部次長は、問診会場・接種会場・待機会場をくまなく点検し、安全かつ安定・円滑な会場運営が行えるよう各箇所でも個々にアドバイス、調整等を行っていた。

同8時45分には、学生(被接種者)の入場・受付が開始され早くも同8時50分から接種開始。

午前10時、問診通過者383名、午前11時同685名、正午過ぎには、同1,000名、午後1時同1,210名、同2時12分同1,500名、同3時5分同1,800名、同4時54分同2,400名、同5時15分には、問診通過人数勘案の上ワクチンの分注に係る端数調整を開始、そして、同5時40分には、本日2450名の接種を完了(この日も会場責任者米原歯学部次長、日本大学病院薬剤部、薬学部の方々等会場の医療従事者、実施本部付事務局スタッフ連携のもと廃棄ワクチンは、皆無)。

接種終了後の同6時から、30分間程度、責任者ミーティングを開催。この責任者ミーティングでは、その日のトラブル事案の報告が各担当部署からなされ(当初は多々あったが日に日に少なくなっていき、7月の初旬を過ぎるとほぼ皆無となっていた)、その改善対応策について、会場

総責任者本田歯学部長、会場責任者米原歯学部次長、実施本部付事務局スタッフのもとで次々と矢継ぎ早に策定決定(即断即決)され、翌日には、その改善対応策に基づきマニュアル等の運用が変更、より一層安全かつ安定・円滑な会場運営が行えるようになっていく。・・・とこのようなPDCAサイクルの日々を期間中重ねていった。

もちろん、このような安全かつ安定した会場運営が行えたのは、歯学部・歯学部付属歯科病院とともに連携しそれぞれの役割を担った日本大学病院、医学部、薬学部等から本接種会場に赴いた医療従事者の方々、職域接種という医療行為を管理・運営面から所轄官庁等と連携を図りながら支えた大学本部の方々、本接種会場となる建物を万全なる状態で提供していただいた理工学部の方々、日々の会場運営を各学部から赴き支えた方々等、その多くの方々の支えがあってこそのことであった。



5 おわりに

令和3年9月30日の首相官邸ホームページ「新型コロナウイルスワクチンについて」には、これまでの総接種回数、163,738,220回(令和3年9月30日公表)と掲載されている。ここには、このうち少なくとも歯学部・歯学部付属歯科病院が担った『職域接種お茶の水会場』の40,678回分も含まれているはずである。

令和2年1月6日、厚生労働省健康局結核感染症課から事務連絡「中華人民共和国湖北省武漢市における非定型肺炎の集団発生に係る注意喚起について」が発せられ、日本時間同年1月31日未明には、世界保健機関の緊急委員会から中華人民共和国湖北省武漢市における新型コロナウイルス関連肺炎の発生状況が「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」には該当すると発表されて以降、歯学部・歯学部付属歯科病院は、さまざまな局面において一丸となって新型コロナウイルス感染症に毅然と立ち向かいその対策に真摯に取り組んできた。

我が歯学部・歯学部付属歯科病院は、今般の職域接種でもその真摯で献身的な姿勢を本学の学生に、本大学に、そして、社会に向け示した。

そして今、改めて歯学部・歯学部付属歯科病院の底力とその存在意義をここにいる多くの学生の皆さん、教職員の皆さんは、認識したのではないだろうか。(参事 事務局)



令和3年度日本大学歯学部 教学課題研修会について

歯学部教学推進センター運営委員会副委員長 黒川 弘康

8月の猛暑の中、令和3年度日本大学歯学部教学課題研修会が「新カリキュラムに対応した順次性のある授業内容と必要な時間割を考える」をテーマに、2日にわたりオンライン・リモートで開催されました。教学課題研修会は、診療参加型臨床実習を担う若手診療医の教育能力の向上を目的に毎夏開催されていますが、本年は、教科担当責任者の先生を中心に、令和5年度新入生から実施予定の新カリキュラムにおける授業内容の構築と、これを効果的に行うための授業時間割についての検討がなされました。

本学部が新カリキュラムを導入する背景の一つには、歯科医師国家試験が年々難化することや、令和6年度から共用試験CBTおよびOSCEが公的試験として位置づけられることがあります。これらの試験では、歯科医師として必要な基本的知識を有するのはもちろんのこと、その知識をどのように活かすか、応用力が求められます。したがって、学生が基本的な知識と柔軟な問題解決能力を修得できるよう、科目間の繋がり、すなわち、関連性や順次性を意識したカリキュラム編成を目標としています。また、歯科医療での新たなニーズや医療人としての成熟に必要な内容、さらに、本学部で提供できる魅力ある授業科目を盛り込むことも目標の一つです。

研修会1日目は、はじめに、現行カリキュラムの精査から見えてくる問題点と新カリキュラムの概要について、全体セッションを通して参加者間で共有しました。また、学務委員会副委員長の林教授から、現在改定作業が進んでいる歯学教育モデル・コア・カリキュラムの基本方針等について講演いただき、研修会での作業の参考としました。引き続き行われた個人作業とグループ作業では、学生が段階的に能力を修得するためには、学修内容がステップアップしながら異なる環境で繰り返し学修できるカリキュラムを準備する必要があることから、各参加者は、それぞれが担当する教科と関係性が強い教科の内容も意識しながら学修到達目標を設定しました。

研修会2日目は、学務委員会の米山教授と臨床実習運営協議会の紙本准教授による、共用試験CBTおよびOSCEの公的試験化についての講演でスタートしました。CBTでは、試験の合格が歯科医師国家試験の受験要件となることから、何らかの対策が必要であることが説明されました。OSCEでは、卒前・卒後の臨床教育をシームレスに接続させるためにも、令和6年度からのスチューデントデンティストの法制化をきっかけに、診療参加型臨床実習のさらなる充実が必要であることが強調されました。グループ作業では、研修会1日目に設定した各科目の学修到達目標を達成するために必要な講義と実習の時間数をもとに、新カリキュラムでの第1学年から第4学年の授業時間割を構成しました。学生が講義で学修した内容についての理解を深めることを目的に、講義と実習の組合せを基本として各科目を配置しました。さらに、週の授業時間割の中での順次性も意識し、基礎系科目の授業から臨床系科目の授業へと繋がる科目配置とすることも試みました。

オンライン・リモートでの開催のため、参加者間で十分な協議ができない場面もありましたが、それを差し引いても、2日間の研修会を通して多くの先生と軌を一にしたことは、現行カリキュラムを改革するためには非常に有意義なことでした。また、参加者の先生からのアドバイスは、新カリキュラムにおける履修系統図策定の一助となるとともに、研修会での各作業は、新科目でのシラバス作成にも有効であることを実感しました。教学推進センター運営委員会では、研修会に参加いただいた多くの先生ならびに関連委員会と協力しながら新カリキュラムのスタートを目指します。

(准教授 歯科保存学第I講座)



歯科医師臨床研修に向けて



紙本 篤

日本国内では、平成18年度から診療に従事しようとする歯科医師を対象に1年以上の歯科医師臨床研修が義務化されています。

その基本的理念は「歯科医師が、歯科医師としての人格をかん養し、将来専門とする分野に

かわらぬ、歯科医学及び歯科医療の果たすべき社会的役割を認識しつつ、一般的な診療において頻繁に関わる負傷又は疾病に適切に対応できるよう、基本的な診療能力を身に付けることのできるものでなければならない。」とされており、歯科医師法第16条の2に定められています。法律が国民を対象としているように、歯科医師臨床研修制度がその対象としているのは患者となります。患者から研修歯科医へ望むことが重要視され、その目的は「患者中心の全人的医療を理解し、すべての歯科医師に求められる基本的な診療能力（態度、技能及び知識）を身に付け、生涯研修の第一歩とすること」とされています。

歯科医師臨床研修の目的を理解した上で、自己研鑽を積む施設を選択することは歯科医師人生の第一歩としてとても重要であり、研修希望者に公平にその機会が与えられる必要があります。歯科医師臨床研修マッチングシステムは、「歯科医師免許を得て歯科医師臨床研修を受けようとする者と、歯学若しくは医学を履修する課程を置く大学に附属する病院又は厚生労働大臣の指定する病院若しくは診療所の研修プログラムとを、研修希望者および研修施設の希望を踏まえて、一定のアルゴリズムに従って、コンピュータにより組合せを決定するシステムです」（一般財団法人歯科医療振興財団、URL：<https://drmp.jp/>）。要するに、研修希望者と研修施設の両方がマッチングシステムを統括しているマッチング協議会へ希望順位を提出し、コンピュータによって一定のルールに基づきその組み合わせが決定されます。詳細は、マッチング協議会のHPにわかりやすく説明されていますので一度確認してみてください（一般財団法人歯科医療振興財団、<https://drmp.jp/algorithm>）。

自身の進路に合った施設で研修するためにも、早いうちに皆様が興味のある施設のHPなどを確認し、説明会などに積極的に参加するようにしましょう。

（准教授 総合歯科学分野）

歯学部新校舎本館 2 期工事について

星野 純子

歯学部新校舎本館1期工事では、旧駿河台日本大学病院跡地に歯科病院、診療系講座研究室、実習室等の機能を備えた建物が平成30年6月に竣工しました。

その後同年10月から旧歯学部2号館を解体し、2期工事として新校舎を建設しております。

2期工事は、1期工事の東側外壁を解体し2期側建物と合体させ、1つの校舎として本年10月末に竣工する予定です。

竣工後、機器備品の設置、研究室の移設を経て、令和4年4月から運用を開始します。

2期工事における校舎の施設は、地下1階に図書閲覧室、ラーニング・コモンズ、ラウンジ、男女学生ロッカー、1階に図書館とラーニング・コモンズ、2階から3階に講義室、4階に実習室、5階から7階に動物ラボを含む基礎系の研究室を設置します。

本館完成後は、教育、研究、歯科診療の全ての機能を備えた校舎となり、学生への教育環境の向上と、研究施設の拡充も図られ、今後の歯学部の発展が期待されます。（参事補 管財課）



講座紹介 (基礎系)

解剖学第Ⅰ講座

昭和46年に解剖学講座が2講座制へ改組されて以来、本講座は肉眼解剖学（解剖学）の講義と実習を担当しています。解剖学は多くの解剖学用語を理解しながら、人体の正常構造についての知識を修得することで、将来、臨床歯科学を学修するための基盤となる教科です。本学部の教育理念である医歯一元論に従い、頭頸部以外に全身の器官系についても多くの時間を割いて授業を行っています。一方、研究はシグナル伝達分子の間葉系幹細胞の分化に与える影響について検討しています。最近では、若年性早老症の原因である lamin A の遺伝子変異が、Wnt/ β -catenin シグナル系を構成する分子の発現と活性化を調節していることを明らかにしました。現在は、間葉系幹細胞から骨芽細胞や脂肪細胞への分化過程にみられる lamin A と Wnt/ β -catenin シグナル系の相互作用について研究を進めています。「優秀で、人間性豊かな歯科医師を一人でも多く育成したい」、そういう気持ちで講座員一同、教育と研究活動に従事しています。

解剖学第Ⅱ講座

当講座は主に第2学年の授業担当をしています。コロナ禍の本年も既に前期に組織学とその実習、歯の解剖学実習を終えました。後期には発生学・口腔組織学とこれらの実習が開講され、前後期とも実習では対面方式も採用しています。後期は第1学年対象の導入授業もスケジュールされ、その他の学年でも統合演習等では講座の専任教員が授業を分担しています。

学生さんにとってはどの授業もどのコマも一生に一度の機会ですから、当講座ではコロナだから遠隔授業だからという妥協は一切せず、ベストを尽くすという姿勢で担当授業に臨んでいます。教材配付の独自サイト、ヴァーチャル組織標本、参考画像アプリなどの提供も実現し、少人数制の第3学年特別研究の授業では、教員も受講学生もCT解析の様子を Zoom で相互にリアルタイムで見せ合って授業を進めたり（世間話もしたり）、成果物を3Dプリンタ出力したりするなんてこともやっています。新しい時代と新しい教育を目指しています。

生理学講座

どうやって咀嚼・嚥下するのか、どうやって味を感じるのか、どうやって消化・吸収するのか、など不思議に思いませんか？生理学は、このような人体の仕組みを研究する学問です。したがって、口腔の疾患を取り扱う歯科医師にとって生理学の知識は必須です。しかしながら、生理学は目に見えない事象を理解しなければならないうえ、臨床歯科医学を学んでいない低学年の段階で学修しなければならず、興味を失いがちな科目でもあります。さらに、歯科医師国家試験では暗記だけでは通用しない生理学の問題が増えていますし、今後CBTでは基礎系科目からの出題が増えることが決定しており、歯学部学生にとって生理学は避けて通れません。もし、生理学でわからないことがあったら、すぐに生理学講座に来てください。生理学講座の教員は生理学のエキスパート揃いですので、みなさんの疑問をわかりやすく説明できます。生理学を得意科目にして、国家試験を乗り越えましょう。

生化学講座

私たちの身体は、物質（原子・分子）が互いに作用し合うことによって成り立っています。10 μ 程度の細胞が集まって組織を作り、さらに器官、そして個体を形成しています。細胞の総数は約37～70兆個で、これらが連携して初めて生命活動を維持することができます。「生化学」は、この最も基本的な原子-分子間の反応、細胞の成り立ちや情報伝達によってもてなされる物質の流れ（代謝）を理解する学問です。「生化学」を学ぶことは、私たちの身体に起こること（病気・疾患）の理解に繋がるもので、「生化学」は基礎医学の基本となる学問です。

「口腔生化学」では、口の中という特殊な環境において、歯・歯周組織がどのように維持され機能しているのか、小さいにもかかわらず、高度に分化したこれら特殊な領域を「生化学」で学んだ知識を基に理解するものです。

大学構内に足を運ぶ機会が制限され、教員と学生が対面することも少ない状況が続いています。桜歯ニュース編集委員会では、在校生とご家族に向けた紹介文を各講座・分野の先生方にご準備頂き、本号・次号に掲載することを企画いたしました。コロナ禍にあって在校生と学校・教員の距離を縮める一助となれば幸いです。

病理学講座

本講座では、第3学年前期で病理学総論を学修し、後期に各論として学ぶ口腔病理学を理解するための基礎作りを行っています。病理学に関する理解はどの程度進んでいるのでしょうか？講義の構成からわかる通り、総論の理解の程度が、口腔病理学の習得に大きく影響します。決して総論を疎かにしないよう心掛けてください。CBT、国家試験では、組織写真に基づく出題が急激に増加しています。バーチャルスライドを用いたオンライン実習では、なかなか組織像を把握しにくいとは思いますが、教科書を中心とした理論的学習はもとより、アトラスなどを用いた視覚的な学習も忘れることなく行ってください。第6学年になり、国家試験の問題集を解くようになると、病理に関連した出題の多さに気づかされることとなります。今のうちから、教科書のどの部分に何が記載されているのか理解し、将来疑問を持った時に、自らこれを解決できる能力を身につけてもらいたいと思います。

細菌学講座

細菌学講座では、主に3年生に微生物（細菌やウイルス等）とその感染症、及び免疫に関する授業と実習を行っています。研究面では、細菌や宿主に関する研究のみならず、ウイルスに関する研究も行っています。歯学部においてウイルス研究が実施できる教室は、世界的に見ても稀です。当講座の強みとなっています。口腔には細菌のみならず、HIVやEBウイルス、インフルエンザウイルスなど多くのウイルスが存在しています。これらに加え昨今、新型コロナウイルスが口腔を感染・増殖の場として利用していることがわかってきました。歯周炎の発症にも、ウイルスが関与している可能性があります。また、その歯周炎と全身疾患、特に呼吸器疾患（肺炎や昨年世界の死因第3位となった慢性閉塞性肺疾患等）との関連研究も進めています。医学のあゆみ6月号において、「口腔と全身疾患研究の最前線」を企画・執筆し、研究成果の一部を紹介しております。ご一読いただけますと幸いです。

なお、研究内容や成果などの詳細は、細菌学講座のホームページ（日大細菌で検索）をご覧ください。

薬理学講座

薬理学講座は、第3学年後期から第4学年前期にかけて主に薬理学とそれに関連する実習を担当しています。講義では、クスリの種類と薬効を網羅的に教えるのではなく、何故それぞれのクスリが固有の薬効や副作用を持つのか、生理学や生化学、細菌学といった基礎医学で学んだ生体のメカニズムを復習しつつ学修します。そして実習では、講義をより深く理解する内容を取り扱っています。また、当講座の研究内容 (<http://www2.dent.nihon-u.ac.jp/pharmacology/>) を生かすことで、先端的な内容に触れ、研究に対する動機づけにもなるように学修内容を工夫しています。また、イラストをふんだんに盛り込んで視覚的に印象に残る講義資料を作成し、プログラムド方式を採用した講義を展開しています。昨今、CBTや歯科医師国家試験への対策を求める声が大きくなってきたため、「アウルの薬理」「秘伝の薬理問題集」を配付して豊富な問題と丁寧な解説を提供し、学生自身で学修内容をおさらい出来るようにしています。

歯科理工学講座

歯科理工学講座は、歯科医療に使用される医療用機器や材料に関する学生教育と研究を担当しています。歯科用機器や材料の進歩は歯科医療の発展に重要な役割を果たしており、これらの特性および原理をふまえて、安全かつ適切に活用できるように教育を行っています。

学部教育では、臨床で使用される歯科材料の物理的、化学的および生物学的な特性と歯科用機器・材料の操作法を学修することを目的としています。講義と実習では、金属、高分子、セラミックスおよび複合材料の特性、成形方法、生体安全性を中心に、臨床で使用する機器のメカニズムや器具の使用法なども扱っています。また、教科書の知識以外に新素材や新しい機器などについても学修します。

歯科理工学は歯科臨床系分野や材料工学の領域と連携し、新しい歯科生体材料の開発、応用研究ならびに新技術の開発を担っています。最近では、チタンクラウンが健康保険に収載され、当講座のチタンに関する研究報告がエビデンスとして活用されました。

講座紹介 (臨床系)

口腔外科学第Ⅰ講座

口腔外科学第Ⅰ講座では口腔外科治療の実際（4年生基礎実習）を担当しています。ここでは口腔外科治療に必要な感染防護から口腔外科の基礎的な手技を学びます。実習項目は共用試験及び歯科医師国家試験に対応しています。基本的な概念をしっかりと理解し、縫合の糸結び実習など基礎的なことから習熟してください。

講義（4年生、6年生）では手術の基本手技、小手術から顎変形症手術や良・悪性腫瘍治療など口腔外科全般を網羅しています。その際、基礎科目や歯科医師に必要な医学的知識も学びます。

臨床面では国内有数の顎変形症手術件数を有し、睡眠時無呼吸症候群の治療に顎変形症手術を応用した睡眠歯科医療の国内最大拠点です。また昨年認可が下りた下顎頭だけでなく側頭骨の関節窩も置換する顎関節全置換術を行うことのできる国内の数少ない主要施設となっております。更に医学部脳神経外科と共同で最高難度手術の頭蓋底外科を手掛けることのできる特色を持った講座です。

口腔外科学第Ⅱ講座

本講座は、第3学年から第6学年の学生を対象に、根尖性歯周炎から頭頸部領域の悪性腫瘍に至る様々な疾患の病態・症状やその処置・手術方法を講義しています。また、第4学年の実習では「口腔外科治療の実際」として、手洗いと滅菌グローブの装着、上下顎模型装着の実習用モデル人形を用いた抜歯、縫合、膿瘍切開などの基本技能の習得を行っています。これは、翌年の第5学年の臨床実習を視野に入れたものであり、それまでに座学と実習で得た知識・技能を活用し、実際の患者さんを診察する際に必要な「問題解決に役立つ見方・考え方」の涵養に努めています。また、第6学年では、内科的診断法の一つである全身所見の診察法の実習も担当しています。今回のコロナ感染症に対する患者さんを含めた歯科医師の感染防止の基本はスタンダードプレコーション（標準予防策）であり、その知識および実践を徹底しなければならない領域であることを強調しておきます。

歯科麻酔学講座

現在、歯科麻酔学講座は助教以上6名を含む、総勢20名の医局員が所属しています。最近の医局員構成の特徴としては女医そして他大学出身者が多いことです。

第4学年の皆さんには、前期に「歯科麻酔学各論」と「口腔外科手術時の患者管理」の講義を、後期に「診査診断学実習」として、救急蘇生およびバイタルサインの測定という安全面で役に立つ実習を行っています。第5学年には臨床実習を、第6学年では「臨床実習アドバンスト」実習を行っています。わからないことはいつでも聞きに来てください。

最近のトピックとして、「レミマゾラム」という超短時間作用性薬剤が発売になりました。全身麻酔の導入、維持に用います。この先、積極的に使われていくと思います。

歯科麻酔学講座では、学生諸君の歯科麻酔に関連する国家試験問題の内容理解が進むように、説明付きの問題冊子を独自に作成しました。かなり充実した内容なので活用すると良いかと思います。

歯科矯正学講座

歯科矯正治療は、不正咬合患者自身の顎や歯を再構築し、口腔や顔面の正常な機能、形態や審美性を回復する治療です。この為に歯を削ったり形態を修復したりするのではなく、本来あるべき位置に歯を移動させることによって改善するところが他の分野と大きく異なる点です。

当講座では矯正用アンカースクリューを固定源として用いることで、患者負担の少ない矯正治療を発展させています。スクリューの安定性について、有限要素法、動物実験やCT画像等の臨床データを用いて検討し、最適な植立条件を見出し良好な治療結果が得られつつあります。また、近年普及しつつあるマウスピース型矯正装置を積極的に取り入れています。抜歯を伴う難症例には適応し難い面がありました。当講座ではアンカースクリューとマウスピース矯正装置を併用した新しい治療法の開発に向けた介入研究実施の認可を得ており、より良い治療結果が得られるよう日々研究開発を行っています。

小児歯科学講座

小児の口腔では、乳歯の萌出と脱落、それに続く永久歯の萌出というダイナミックな変化がみられます。歯が生えることは本人にとってとても重要なことであり、また家族にとっても喜ばしいことですが、その後、むし歯、歯肉や粘膜の異常、外傷、歯並びや噛み合わせの問題が生じることがあり、大学病院においては主に小児歯科医が対応しています。

全国の小児歯科医が力を入れている最近の取り組みとして、低ホスファターゼ症(HPP)の早期発見と対応があります。HPPは進行性の骨の疾患で、血液や組織中のアルカリホスファターゼの低下により、骨の脆弱化や乳歯の早期脱落が生じます。1歳くらいで乳歯が脱落してしまうこともあります。幸い数年前に革新的な酵素補充療法が開発され、治療に成果を上げています。乳歯の動揺や早期脱落をきっかけに発見されることが多いため、小児歯科医の役割は重要です。当講座でも医学部小児科と連携し、HPPの早期発見と歯科治療に取り組んでいます。

歯科放射線学講座

当講座では、さまざまな物理現象を応用して非侵襲的に生体情報を取得して画像化し、診断を行っています。従来は、単純なX線画像や顎のパノラマ断層像が中心で2次元的な画像診断でしたが、最近ではコンピューター断層撮影(CT)、歯科用コーンビームCTをはじめ、超音波や水素原子核の共鳴現象によって発生する電磁波を応用したMRIおよび放射能を応用したシンチグラフィと多岐にわたり、しかも3次元画像となっています。まさに、情報の洪水で扱われてしまいそうになりますが、画像化されるのは正常解剖とそれが変化したものですので、3次元的な正常解剖をしっかりと理解するのが基本となります。したがって、3次元的な構造を十分に復習するようにしてください。国家試験でも画像解剖学が重視されています。これに対応するために、4年生や5年生の実習では、iPadやPCを使用して、3方向からのCTやMRIの断層画像の実習を行っています。この機会に、3次元的な画像解剖を習得するようにしてください。

口腔診断学講座

口腔診断学講座では、歯科を受診する患者さんの主訴に応じた正しい診断を下し、治療方針を導くための教育、研究、臨床を担っています。この対象となるのは、齲蝕や歯周病といった歯に起因する疾患だけでなく、口腔顔面領域の器質的疾患(口腔組織に明らかな病変が存在するもの)、機能的疾患(組織に明らかな傷害、病変が存在しなくても機能的な変化に伴って症状が生じるもの)、さらには特発性疾患(明らかな原因となる傷害、病変、機能異常が説明できないもの)についても診断する必要があります。学生の皆さんは、まず、器質的疾患を確実に診断できるようにしましょう。次に関連痛等の機能性疾患についても理解を持ちましょう。さらに、これからの歯科医師には、舌痛症等の特発性疾患に関する知識と対応も求められます。患者さんの身体だけでなく、心を診ることも重要です。口腔診断学では患者さんに寄り添った全人的診療を学んでください。

摂食機能療法学講座

第6学年の皆さん、前期の演習(講義、臨床実習、基礎実習)はいかがでしたか。

第5学年まで習ってきた歯学、歯科臨床とは、趣の異なるものであったかと思います。皆さんからは、「もっと早い学年で学びたかった」との声も聞かれました。

摂食機能療法学講座は、全国29歯科大学で本学唯一の講座です(国家試験には単独で8%出題されます)。今年度は、患者さんに直接タッチする機会はありませんでした。その代わりに診療ビデオの供覧により、外来だけではなく、訪問診療や日本大学病院の病棟診療のダイジェストを、各自にムラなく紹介することができました。この分野は、患者数に比べて、歯科医師数が絶対的に不足していることも感じられたと思います。

演習で培ったあの活発な想像力と創造力をもってすれば、臨床実施系の問題は自ずと解決の道に導かれていくことでしょう。来春は全員が歯科医師となり、一緒に仕事をしたいと願っています。

次号では、基礎系(衛生学講座、法医学講座)、臨床系(歯科保存学第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ講座、歯科補綴学第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ講座、総合歯科学分野)、一般教育(医療人間科学分野、外国語分野(英語)、健康科学分野、数理情報科学分野、基礎自然科学分野(物理学・生物学・化学))を掲載予定です。

令和3年度 新任教員FDワークショップ



金子 啓介

令和3年5月15日にZoom (Web会議ツール) を介して新任教員FDワークショップが開催され、様々な学部から様々な役職の教員が多数参加した。少人数制のグループワーキングは

自己紹介から始まった。全ての教員が異なった専門分野のプロフェッショナルである。旧シラバスの見直しと新シラバス作成を目的として自分の知らない観点での考え方や意見などを聞くことができ、非常に興味深い内容であった。テーマは「国際社会と日本」であり、実に様々な意見が飛び交ったが、全員が日本大学の教育理念である「自主創造 (自ら学ぶ・自ら考える・自ら道をひらく)」に基づき、日本大学マインド (①日本の特質を理解し伝える力、②多様な価値を受容し、自己の立場・役職を認識する力、③社会に貢献する姿勢) を有する自主創造パーソンの育成・輩出することを目標に、お互いに理解を深めながら新シラバス作成のための作業を行うことができた。

2016年の中央教育審議会によって「卒業の認定に関する方針 (DP)」、「教育課程の編成及び実施に関する方針 (CP)」、「入学者の受け入れに関する方針 (AP)」策定及び運用に関するガイドラインが提示され、同時期に日本大学は「日本大学教育憲章」を制定し、これに則りカリキュラムの見直しや評価を繰り返し行ってきた。歯学部でこの成果が実際に現れるのはまだ数年先のことでありとされるが、今回のFDワークショップでは、カリキュラム見直しの重要性、体系的で組織的な教育の確立、問題点の抽出・改善などの考え方を学び体験できたのは、まだ教育経験の浅い私にとって良い機会であった。

(助教 歯科麻酔学講座)

**令和3年度
新任教員FDワークショップ**

令和3年5月15日 (土) 13時30分～17時00分

定刻までお待ちください。BGMを流しておりますので、各自音声の確認をお願いします。

日本大学歯学FD委員会プログラムワーキンググループ

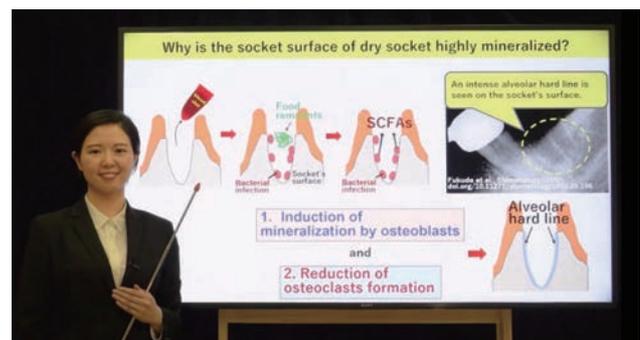
Student Clinician Research Program (SCRP) を終えて

高田 紋花

第27回SCRP日本代表選抜大会に日本大学歯学部代表として出場させていただきました。本大会は全国の各歯学部の代表学生が研究成果を競う大会です。ビデオによる1次審査とオンラインによる二次審査によって行われ、Additive alveolar bone mineralization in the dry socket may be induced by oral bacterial metabolites (口腔内細菌代謝産物がドライソケットにおける歯槽骨石灰化亢進に与える可能性) というタイトルで第3位という結果となりました。この研究は、古い口腔外科の本に「ドライソケットではX線上で明瞭な歯槽硬線が観察される。」とあったのを読んで抱いた疑問から始まりました。細菌感染によっておこる歯周病では骨吸収が起こるのに、抜歯窩骨壁の細菌感染によって起こるドライソケットでは抜歯窩骨壁に骨添加が起こるのは何故だろうか? という疑問です。このことについて生化学の津田先生に相談し、培養細胞を用いた実験を重ねましたところ、抜歯窩内の細菌代謝産物が抜歯窩表層の骨の石灰化を促進する可能性が示唆される結果を得ました。

自分の疑問に対する1つの答えを形にすることができ、世界で誰も知らないことを知ることができるという研究の魅力に気が付けたとても貴重な経験となりました。今後も探究心を持ち続け、日々研鑽を積んで参りたいと思っております。

COVID-19パンデミックによる研究中断や、英語での発表、不慣れなビデオ審査やオンライン発表など、困難な場面も多々ありましたが、多くの方々に支えていただき無事にこのような結果を残すことができました。ご指導ご協力を賜りました津田先生、口腔外科白土先生、細菌学Cueno先生、衛生学田中先生、教務課の金子さん、鈴木さんをはじめ、この大会への参加を後押しして下さった日本大学歯学部にご感謝申し上げます。 (第5学年)



随 想

日大をふりかえって



田村 隆彦

私は、日本大学にお世話になって50年になります。それは附属高校に入学したため、なんと半世紀も経過したということです。人生100年時代と世間では言われていますが、その時代が実際に訪れるのはまだまだ先の話であろうと思いますので、人生の大半を日本大学とともに過ごした、ということになりそうです。

私が思う日本大学の人々は、親切でお人よし、人に優しくすることが、何も躊躇わずに自然と出来る人が多いのではないかと、すなわち古き良き考えを持つ人が多いのだと思います。それは親から子、子から孫へと先人から受け継がれてきた継承のようなものだと思います。東日本大震災、中国武漢に端を発した新型コロナウィルスの世界的な流行、人災とも言われている熱海での土石流等、不安が募ることが多発する今、この精神は非常に大切なことだと思っています。だからこそ、日大精神をこれからも受け継いでいかなければならないと思います。しかし、ひとつ気になることがあります。それは私も含めてですが長いものに巻かれてしまうことです。しっかりとした根拠があるときは、意見なり、行動を示すべきだと思います。根拠があり行動を起こすとそれなりの責任が発生しますが、しっかりとした考えを示すことが大切です。長いものに巻かれるのはリスクがありませんが、何の発展性も発見もありません。

今回の新型コロナウイルス感染症では、死亡者・重傷者数も諸外国に比べれば一桁も二桁も違いがある日本で何を根拠として意見し、行動すべきかが定まっていけない気がします。その様な中で65歳以上の方々から始まったワクチン接種は、若者へと進んでいます。長いものに巻かれたままいつまでも1年前の状態を続けることはできませんが、PCR検査やワクチン政策だけでコロナ禍前の生活が戻るとも思えません。ワクチンについては短期的な効果や副反応だけでなく、長期的な影響も見えていく必要もあるでしょう。

今回の新型コロナウイルス感染症では、死亡者・重傷者数も諸外国に比べれば一桁も二桁も違いがある日本で何を根拠として意見し、行動すべきかが定まっていけない気がします。その様な中で65歳以上の方々から始まったワクチン接種は、若者へと進んでいます。長いものに巻かれたままいつまでも1年前の状態を続けることはできませんが、PCR検査やワクチン政策だけでコロナ禍前の生活が戻るとも思えません。ワクチンについては短期的な効果や副反応だけでなく、長期的な影響も見えていく必要もあるでしょう。

日本大学歯学部の学生は、先を見通すのが難しい中、勉学に臨床実習に励んでいます。より良き歯科医師になる・育成するという目的のもと、考える力や臨機応変な対応能力を備えるために、学生だけでなく指導者も、さらに努力するべきではないでしょうか。

(専任講師 歯科矯正学講座)

脳の特徴を掴(つか)み、 取り出し易く臨床に即した 知識を！



田中 一

母校に35年勤務し、随想(折にふれ感じた事柄を書き留めた文)を書く機会を、初めて得た。

「理解」は苦手、けれど「文字列を覚える」のは得意…という学生を、昨今多く見掛ける。しかしそのような学生は、臨床の現場に立つと、目の前で展開される現象と知識とが連携せず、苦戦を強いられる。そこで、彼らのために、「理解」するコツを、この随想で示してみたい。

そもそも患者は、一人として「教科書で学んだ」通りの反応は示さない。一方医療従事者は、「直面する問題は何か？」を瞬時に特定する必要に迫られる。しかしその「何か？」は、実は授業で学ぶ「用語」であることが多い。将(まさ)にキーワードである。そこで授業中には、全力集中で「用語」を検出・認識して貰いたい。

時に「用語」は、どのように「理解」すれば、良いのだろうか？コツがふたつ在る…ように思える。まず、「用語」は鵜呑みにせず、別の言葉への置き換える、すなわち「言い換え」を心掛けてみよう。「要するに、あのことね!？」みたいな「要約」ができれば、更に望ましい。次に、どのようなシチュエーションでその「用語」が使われるのか？を具体的に描いてみよう。イメージングと呼ぶ。カラーの動画で。その動画に「音響」や「振動」が加えられたら、更に望ましい。なぜなら、脳科学に拠れば、「印象が強いほど」「必要!と認識されるほど」「反復表示されるほど」、脳は複雑な情報も一瞬で処理し、取り出し易いように保存してくれる…からである。15秒とか30秒間とかのTVコマーシャルで、複雑な情報が瞬時にして、そして鮮明に幾つかのメッセージとして我々視聴者の脳裏に残るように。

共用試験のCBTは、主に画像を読み解く試験である。国試でも、設問のイメージングが強く要求される。「覚えた文字列」を答案用紙に再現出来る…は、医療従事者に要求されない。「用語」の認識と「用語」概念の鮮明なイメージングと、このふたつを心掛け、取り出し易く臨床に即した知識を身に着けて行って貰いたい。

共用試験のCBTは、主に画像を読み解く試験である。国試でも、設問のイメージングが強く要求される。「覚えた文字列」を答案用紙に再現出来る…は、医療従事者に要求されない。「用語」の認識と「用語」概念の鮮明なイメージングと、このふたつを心掛け、取り出し易く臨床に即した知識を身に着けて行って貰いたい。

共用試験のCBTは、主に画像を読み解く試験である。国試でも、設問のイメージングが強く要求される。「覚えた文字列」を答案用紙に再現出来る…は、医療従事者に要求されない。「用語」の認識と「用語」概念の鮮明なイメージングと、このふたつを心掛け、取り出し易く臨床に即した知識を身に着けて行って貰いたい。

(専任講師 細菌学講座)

オピニオン (医療技術部門)

○東京オリンピック・パラリンピックも終わり、一気に秋の気配を感じられるようになりました。開催中はテレビ観戦三昧の毎日を送っていたので、すっかりオリ・パラロスに陥ってしまいました。コロナウイルス第5波の今、新規感染者は減りつつあり、ワクチン接種も50%を超えるところまで来ています。今後withコロナ及びafterコロナに向かって新たなスタンダードを構築していかなければならないと思う次第です。

竇代 隆弘 (放射線室)

○病院の至る所に薬品があり、薬剤師は院内の多くの部署の方と関わっています。薬剤室内での仕事も製剤担当・情報担当などの分業方式にしていなくて多岐に渡っています。時代や医療体制の変化によって薬剤師の役割も広がっていきな、歯科病院における薬剤師へのニーズを考え、前向きに柔軟な対応ができるようにしていきたいです。課題も多いですが、必要な情報伝達や多くの問い合わせに回答し、相談していただける薬剤室となるように日々奮闘しています。

屋木 妙子 (薬剤室)

○マスクが生活必需品になってから、もうずいぶん経つように思う。マスクをしていることにもだいが慣れて、出掛けにうっかり忘れて引き返すなんてこともなくなった。カラフルなマスクも増えて、目にも鮮やかだ。しかし最近になって、自分の表情が乏しくなったような気がしている。長いマスク生活で、表情筋の動きが鈍くなってしまったのだろうか。これではいけないと、最近はマスク下で笑う時も意識して口角を上げるようにしている。

高橋 まき (臨床検査室)

○歯科病院の食事は、必要な栄養を摂ることはもちろんですが、食べやすさと手術後の創傷のしみにくさに配慮しなければなりません。固い食材は避け、柔らかく仕上げる調理法にしたり、香辛料や酸味はしみやすいため少量とし、その代わり風味を生かすなど味付けが単調にならないようにしています。私自身患者さんと対話することで、どんな食事が手術後は食べやすいのかを教えてもらいました。今後も、食べる人のことを思い、入院中に少しでも楽しんでもらえる食事を考えていきたいと思います。

畔上 由佳里 (栄養管理室)

○先日、職域コロナワクチン接種が終了しましたが、入院患者はまだ未接種の年代の患者が多く、PCR検査陰性で入院し手術されますが、検査後から入院までの期間に感染している可能性もある為、病棟では感染対策を徹底しています。先日は日本大学病院の感染担当医師・感染認定看護師長に発生時病室でのゾーニングについてご指導頂きました。スタッフ一丸となって感染対策に取り組んでおります。一日も速く収束する日を望み、マスク無の笑顔で看護がしたいです。

飯田 美保子 (看護室)

○コロナ禍真ただ中の現在マスクの着用は必須である。□元にマスクが当たり前となった今、矯正治療を開始する患者が急増していると聞く。理由は、人に気づかれずに矯正治療が出来ることである。また、テレワーク化が進む中Zoomなどを使ったオンライン会議などでも□の中の装置はそれほど目立たない、目立ちにくい矯正治療法として、マウスピース矯正や舌側矯正などがある。Covid-19が流行し始めてから1年以上が経過したが収束も程遠い、今なお矯正治療を開始するチャンスではないかと考える。

納村 伸弘 (歯科技工室)

○子ども達の間で新型コロナウイルスの感染が広がる中、二人の子をもつ母として子ども達が感染したらどうしようと不安を拭い去ることは難しい。住居地域での陽性者も爆発的に増えているが、初めての緊急事態宣言の時に比べ住民達にも悪い意味での『慣れ』が出てきているように思う。結局は政策云々ではなく個人の意識の問題ではないだろうか。子ども達が対面で笑いながら給食を食べ、マスクを外して遊ぶ姿が見れる日が一日も早く来る事を願っている。

山谷 真理 (歯科衛生室)

○歯科医療に携わるようになり、全身にとって□の健康維持の大切さを痛感した。□腔は肉眼的に病変を直視できる特徴をもち一般的な病気として歯周病、う蝕、□内炎があげられるが、近年□腔がんの発生が増加傾向にある。また種々の□腔粘膜疾患に対し補助的診断である細胞診を行うことで早期発見を、さらに確定診断である組織診の病理診断の業務を日々行っている。これら診断の適切な運用方法について臨床医との連携を大切に今後も励んでいきたい。

金田 悦子 (病理診断科)



今冬の季節性インフルエンザに備えて

これからの季節（12～3月）、インフルエンザの流行が心配されます。インフルエンザの予防には、(1) 飛沫感染・接触感染を防ぐ、(2) 予防接種を受ける、(3) 免疫力を高める、ことが大切です。

昨年のインフルエンザ感染者数は、皆さんの感染予防対策で激減しましたが、そのため「今年も流行らないだろうからワクチン接種しなくても大丈夫でしょう」と判断するのは危険です！流行がないと免疫を持たない人が増え続けているので、もし流行がおきたらこれまで以上に大流行になる可能性があります。そのためにも、今シーズンもインフルエンザワクチン接種を感染症学会や様々な医療者の方が強く推奨しています。

ワクチンについてのご相談や、インフルエンザ罹患後の登校停止や体調についてのご心配等がありましたら保健室（03-3219-8050）にご連絡ください。

NewsPlus α

☆東京オリンピック・パラリンピック競技大会のメディアカルスタッフとして、本学部の歯科医師及び歯科衛生士が派遣されました。写真は上段左から、歯科医師・荻澤翔平（口腔外科Ⅰ）、小森谷康司（保存Ⅰ）、蓮池聡（保存Ⅲ）、石井亮（保存Ⅰ）。下段左から、歯科衛生士・坂井雅子、浅野若葉、川本亜紀、清水千津子。



学生生活

= 日本大学創立130周年記念奨学生 =

第2種

(歯学部)

第1学年

第5学年

小笠原藤香

西山 実希

第3種

[新型コロナウイルス感染症対応]

(歯学部)

第1学年

第2学年

第4学年

(歯学研究科)

第4学年

松葉 心亜

村上 芽以

永田 陸

永島 利通

学 事

歯学部行事予定

- 10月 4日(月) 日本大学創立記念日
- 10日(日) ワールド・カフェ
- 16日(土) 編入学試験・転部試験・外国人留学選抜
- 17日(日) ワールド・カフェ(予備日・補講)
- 30日(土) 解剖体追悼法要
- 11月 20日(土) 学校推薦型選抜(公募制)
- 学校推薦型選抜(付属高等学校等)
- 校友子女選抜
- 1月 21日(金) 卒業者発表
- 23日(日) CBT

お知らせ

寄付金の受け入れ

= 研究助成金 =

60万円	日本大学歯学部歯科矯正学講座同門会 歯科矯正学講座へ (会長 富永 雪穂 殿)	7.5
40万円	ULTRADENT JAPAN株式会社 歯科保存学第Ⅰ講座へ (代表取締役社長 鍛地 裕司 殿)	9.1

編集後記

本学部では、学生や教職員に対する2度目のCovid-19 ワクチン接種（職域接種）が一通り終わりました。しかし、全国の医療逼迫による危機的な状況は今もなお続いています。多くの人が毎日不安な気持ちで生活していると思いますが、中には実際に自分や家族が感染して辛い日々を過ごしている方や、コロナ対応で疲弊している医療従事者の方、ワクチン接種に懐疑的な方など、その状況は様々です。このように私たちは新型コロナに1年半以上振り回されていますが、だからといって物事が保留になっているわけではありません。時間は刻々と過ぎていきます。ですので、ふと、自分の学業・仕事・プライベートをもっと充実させていかないと！と焦ることもあれば、この状況を言い訳にして、うまくいかない、出来ない、無理！と嘆くこともあります。辛いですよ。でもだからこそ、この経験がきっと自分の成長につながると信じて、真面目にコツコツと毎日を過ごしていこうと思います。(S.H)

表紙の写真は佐藤紀子先生（健康科学分野）にご提供頂きました。

第212号 日本大学歯学部発行
東京都千代田区神田駿河台1-8-13 TEL 03(3219)8001